

楽曲解説

10/22 (日) 第897回オーチャード定期演奏会

10/23 (月) 第898回サントリー定期シリーズ

解説=寺西基之

本公演はいわゆる“ロシア国民楽派”特集で、19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのロシアの民族色溢れる作品が並んでいる。19世紀半ば以降のロシア音楽界というと、このような一般に“国民楽派”と呼ばれる民族主義的な音楽一色という印象を持たれているかもしれない。しかし本誌前号の「次回定期演奏会の聴きどころ」(※)で一柳富美子氏が指摘されていたように、当時のロシアはまだまだ西欧の音楽に支配されていたのが実情で、そうした状況下で、民謡研究で知られるアフナーシエフ(1826-1871)の「ロシア民謡集」が出されたことなどを契機に、1860年代からロシアの音楽文化を広めようという動きが始まった。そうした当時の音楽界については今日見直しが進んでいるようだ。

10/22

10/23

グリンカ(1804-1857)

幻想曲『カマーリンスカヤ』

ミハイル・グリンカ(1804-1857)にしてもこれまで“国民楽派”の祖として神格化され(背景に旧ソ連の国策もあった)、彼の『カマーリンスカヤ』(1848年)がその出発点と見なされてきた。この作品はロシアの婚礼歌「高い山々から」と踊り歌「カマーリンスカヤ」の旋律を用いて作り上げられている。グリンカ自身によると地方で接した婚礼歌の旋律に「カマーリンスカヤ」との共通点があったことから、曲のアイデアが生れたという。短い導入の後に弦のユニゾン(続いて木管)で婚礼歌が示され、程なくテンポを速めて軽快な「カマーリンスカヤ」の旋律がヴァイオリンに出現、以後この主題が執拗に反復され、そこに婚礼歌も組み合わせられながら発展する。“国民楽派”の原点とされてきたのも、このように民謡旋律の引用で曲を作り上げた点にあった。

しかし一柳氏によると、民謡旋律を用いたロシアの楽曲はすでに18世紀のトゥルトーフスキーのチェンバロ曲に遡ることができ、また「カマーリンスカヤ」の旋律を用いた楽曲にもオーストリアの作曲家フンメル在先例がある(一柳富美子「芸術音楽の中のフォークロア(1)カマーリンスカヤからバーバ・ヤガーへ」ロシア・フォークロア談話会 機関誌「なろうど」65号 pp34-42)。このフンメルの作品は「ピアノ三重奏曲変ホ長調作品96」の終楽章のロンドで、「カマーリンスカヤ」の旋律がやはり何度も回帰する。フンメルは1822年にロシアを訪れ、その際この作品を披露したが、グリンカはこの時フンメルと会っており、間違いなくこの曲を知っていた。つまり「カマーリンスカヤ」を主題に用いる彼の発想にはモデルがあった。とはいえ、この旋律の反復の中に婚礼歌を織り込み、対位法書法や変奏技法を結び付けたグリンカ

の手法がロシアの作曲家たちに及ぼした影響は大きく、以後、民謡の引用で楽曲を構成する作品が次々生み出されたことをみても、この作品が“国民楽派”の運動形成に大きな役割を担ったことは間違いない。

幻想的ワルツ

ところでグリンカは、名ピアニストだったフンメルから高く評価されたほどのピアノの名手で、ピアノ曲も多数残した。「**幻想的ワルツ**」も元々1839年にピアノ曲として作曲されている。発表当初から好評を博し、作曲者自身の手で1856年に管弦楽用に編曲された(のちにリムスキー＝コルサコフとグラズノフが改訂しており、本日はその版で演奏される)。3部形式で、主部のスラヴ的ともいえる暗いメランコリックな性格はのちのチャイコフスキーに通じるものがある。

歌劇『皇帝に捧げし命』より第2幕「クラコヴィアク」

グリンカはオペラでも重要な業績を残した。1836年初演の『**皇帝に捧げし命**』はロシア・オペラの礎石ともいわれた作品で、ロマノフ朝成立期の17世紀ロシアを舞台に、農民スサーニンが進攻してきたポーランド軍を欺いて森に導き、自ら犠牲となって皇帝の命と国を救うという物語。全体の様式や書法はいまだ当時のイタリアなどのオペラの伝統に基づいており、その点で“国民楽派オペラ”とはいえないが、ロシア的な旋律は随所に窺え、特にロシアとポーランドを音楽的に対比させている点が興味深い。「**クラコヴィアク**」は第2幕のポーランド王の舞踏会の場面で奏される華麗なポーランド舞曲で、このオペラのポーランド的な面を示す。

幻想曲『カマーリンスカヤ』

〔作曲年〕1848年 〔初演〕1850年3月15日ベテルブルク(日付はロシア旧暦による。以下同じ)
〔編成〕フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

幻想的ワルツ

〔作曲年〕1839年(管弦楽編曲1856年) 〔初演〕不明
〔編成〕フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、打楽器(トライアングル)、弦楽5部

歌劇『皇帝に捧げし命』より第2幕「クラコヴィアク」

〔作曲年〕1835年～1836年 〔初演〕1836年11月27日ベテルブルク(歌劇全曲)
〔編成〕フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

ボロディン(1833-1887)

交響詩『中央アジアの草原にて』

先述のように初期の“国民楽派”は民謡の直接の引用から出発したが、やがて民謡の語法やリズム的特徴、歴史的題材や文学的標題、ロシア語の特質を反映させた旋律法などを結び付けて民族性を表現するようになる。そうした動きに寄与した作曲家グループが“力強い一団”(いわゆる“5人組”)だった。

その一員であるアレクサンドル・ボロディン(1833-1887)は、グルジア系の血筋ゆえにしばしばオリエンタリズムを打ち出した作風を示したが、それは1880年に皇帝アレクサンドル2世の即位25周年祝賀行事のために書いた『**中央アジアの草原にて**』(原題は『中央アジアにて』)にも当てはまる。砂漠広がる草原でロシアの歌と東洋の歌が馬や駱駝の足音とともに遠くから聞こえてきて、ロシア兵に護衛されて旅するアジアの隊商の一行が通り過ぎ、ロシアとアジアの歌が一つに溶け込んで次第に遠くの空に消えゆく、といった光景を描いた管弦楽曲で、冒頭クラリネットが示すロシアの民謡「野の道は一つでなかった」とそれに続くイングリッシュホルンの東洋の旋律が組み合わせられつつ美しい発展が織りなされる。

〔作曲年〕1880年 〔初演〕1880年4月8日ベテルブルク リムスキー＝コルサコフ指揮
〔編成〕フルート2、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

リャードフ(1855-1914)

交響詩『魔法にかけられた湖』op. 62

アナトーリ・リャードフ(1855-1914)は後述のリムスキー＝コルサコフに師事、民謡を題材に幻想的、超自然的な情景を描く絵画的な小品でロシア的世界を表現し、“音の細密画家”ともいわれた。

1908年(前年説もある)の『魔法にかけられた湖』も“御伽話的な絵画”^{おとぎ}の副題どおり、神秘的な湖を絵画的に描いた作品。弱音器付きの静かな響きが支配し、かすかに揺れる湖面を映し出す弦を背景に、様々な楽器が断片的な旋律を点滅させる。フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」の影響も指摘されている。

交響詩『キキーモラ』op. 63

1909年の『キキーモラ』はサハロフの「ロシア民間説話集」を題材とする。キキーモラはロシア民謡の女邪神。まずアダージョの導入、岩山の魔法使いのもとで、猫の子守歌(インゲ

10/22

10/23

リッシュホルン)を聞きながら幼いキキーモラ(ピッコロとオーボエの鋭い動機)が水晶の揺籠(チェレスタ)の中で育つ様が描かれ、続くプレストの主部では、真っ黒の痩せ細った姿に成長したキキーモラが大声を上げたり、大麻を紡いだり、高笑いしたりなど、落ち着きなく動き回る様子がスケルツォ風に表される。

交響詩『バーバ・ヤガー』op. 56

『バーバ・ヤガー』は1904年の完成だが、着手は1891年頃といわれる。アフナーシェフの「ロシア民話集」に着想を得て、伝説の魔女バーバ・ヤガーを幻想的なタッチで描いている。口笛を示す鋭い音型(終結部分にも現れる)で始まり、魔女(ファゴットの主題)が白に乗って森の中を進む様が枯れ葉や木々の音の描写とともに表され、最後は遠くへ消える。

交響詩『魔法にかけられた湖』op.62

【作曲年】1908年 【初演】1909年2月ベテルブルク

【編成】フルート3、オーボエ2、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、打楽器(大太鼓)、チェレスタ、ハープ、弦楽5部

交響詩『キキーモラ』op.63

【作曲年】1909年 【初演】1909年12月12日ベテルブルク

【編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器(シロフォン)、チェレスタ、弦楽5部

交響詩『バーバ・ヤガー』op.56

【作曲年】1904年 【初演】1904年3月18日ベテルブルク

【編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、シロフォン)、弦楽5部

リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)

“力強い一団”は西欧的なアカデミズムに批判的な立場をとったが、メンバーの中でニコライ・リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)は1871年にベテルブルク音楽院の教授に就任したことを機にアカデミックな路線を重視するようになり、色彩的な管弦楽法や独創的な和声法を開拓していく。それは民話や歴史的題材のうちにロシアの諸相を表現した彼の数々のオペラに顕著に示されている。

歌劇『雪娘』組曲

歌劇『雪娘』は1880～1881年の所産。民話に基づくオストロフスキーの劇によって作曲者自身が台本を作成した物語は、架空の北国ベレンディを舞台に、氷の翁と春の精の間に生

れた美しくも愛の心を知らない雪娘を主人公に展開する。演奏会用に纏められた組曲は全4曲。**第1曲「序奏」**はオペラのプロローグの序奏で、春の到来と自然の目覚めを描き、鳥の囀りが聞こえる(オペラ原曲ではテノールの森の精の歌が入る)。**第2曲「鳥たちの踊り」**はプロローグ中の鳥の歌と踊りの場面で、民俗的な節回しを持つ軽快な曲(組曲版でも原曲の声楽パートが楽譜に掲載されている)。**第3曲「皇帝の行進」**は第2幕におけるベレンディ国皇帝一行の風変わりな行進曲。**第4曲「旅芸人たちの踊り」**は第3幕の宴の場面で踊られる活気溢れる舞曲。

歌劇『見えざる町キーテジと聖女フェヴローニャの物語』組曲

歌劇『見えざる町キーテジと聖女フェヴローニャの物語』は晩年の1904年(翌年説もある)に完成された。タタールに侵攻された際に湖の中に姿を消して難を逃れた町キーテジと敬虔な女性フェヴローニャによる救済の伝説を扱った宗教的・神秘的なオペラで、ロシア的な特質とともにワーグナーの影響が見られ、“ロシアの『パルジファル』”とも呼ばれる。組曲は弟子のシテーインベルクによって編まれた。**第1曲「前奏曲:自然への讃歌」**は森の情景を描く第1幕の序奏。ワーグナーの「森のささやき」を思わせる曲で、葉擦れを表す弦を背景に木管が鳥の声を描写、やがて森に住む娘フェヴローニャを示す民俗的な旋律がヴァイオリンに現れる。**第2曲「婚礼の行列～タタールの侵攻」**は第2幕の音楽から抜き出し再編したもので、キーテジの公子に見初められたフェヴローニャが婚礼に向かう行列の音楽(任意で民俗楽器のドムラやバラライカが加わる。オペラ原曲は合唱入り)に始まり、終りは暗転してタタール人の急襲を描き、そのまま**第3曲「ケルジェネツの戦い」**(第3幕第2場への間奏曲)に突入、民謡「タタールに捕らわれ」の引用や全音と半音の交替による音階(リムスキー＝コルサコフ音階)を効果的に生かして戦闘を描出する。第4幕の音楽による**第4曲「フェヴローニャの昇天と見えざる町への道」**は、第1場で疲れて動けなくなったフェヴローニャが聖化される場面の音楽に始まり、見えざる都への行程である第2場への間奏曲を中心に再編したもので、彼女の昇天と天の都での公子との婚礼を描く。

歌劇『皇帝サルタンの物語』組曲

歌劇『皇帝サルタンの物語』はプーシキンの生誕100年を記念して1899～1900年に書かれたオペラで、彼の同名の民話叙事詩を原作とする。皇帝サルタンの妃は邪悪な姉たちの陰謀で王子とともに海に流されるが、王子は魔法の島で白鳥を助けたことで運命が開け、最後は白鳥から変身した姫を得て、サルタンと再会する。3曲からなる組曲はオペラ中の3

つの前奏曲を取り出したもので、スコアには各曲ごと冒頭に標題としてプーシキンによる(もしくはプーシキンに基づく)一節が掲げられている(当オペラの中でも特に有名な管弦楽部分である「熊蜂は飛ぶ」はこの組曲には含まれない)。3曲ともにファンファーレ(トランペット)で開始される。**第1曲**は第1幕の前奏曲で、戦に旅立つ皇帝の別れと出発を描く行進曲。第2幕の前奏曲である**第2曲**は樽に入れられて海に流された妃と王子を描いており、暗黒に包まれた茫洋たる大海が表され、最後に仄かな明るさを見出す。**第3曲**は第4幕2場への前奏曲で、ファンファーレ(途中で何度か^{りす}も帰^り)に続く魔法の島の情景の描写の後、島の3つの奇蹟、すなわち「歌う栗鼠」がピッコロとフルートによる民謡の軽快な音楽で、“33人の勇士”が勇壮な行進曲で、そして叙情的な広がりある音楽で“白鳥の王女”が描かれ、輝かしいコーダに続く。

歌劇『雪娘』組曲

【作曲年代】1880～1881年 【初演】1882年1月29日ペテルブルク(歌劇全曲)

【編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2(2番はイングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム)、弦楽5部(任意でソプラノ独唱、女声合唱)

歌劇『見えざる町キーテジと聖女フェヴローニャの物語』組曲

【作曲年代】1902年～1904年 【初演】1907年2月7日ペテルブルク(歌劇全曲)

【編成】フルート3(第3番はピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3(第3番はバス・クラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、スレイベル、鐘、グロッケンシュピール)、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部(任意で民俗楽器のドムラ、バラライカ)

歌劇『皇帝サルタンの物語』組曲

【作曲年代】1899年～1900年 【初演】1900年10月21日モスクワ(歌劇全曲)

【編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3(3番はバス・クラリネット持ち替え)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン)、ハープ、チェレスタ、弦楽5部

てらにし・もとゆき(音楽評論)／1956年生まれ。上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程(西洋音楽史専攻)修了。音楽評論家として執筆活動を行う一方、(公財)東京二期会評議員、(公財)東京交響楽団監事、新日鉄住金音楽賞選考委員、(公財)アフィニス文化財団理事などを務める。共訳書にグラウト／ノリスカ『新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。

※関連記事「特別客演指揮者 ミハイル・プレトニョフによるユーラシアン・フォークロア」は東京フィルウェブサイトからもご覧いただけます。

